

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

11

NOVEMBER
2010

CONTENTS

平松英子 & 野平一郎
～シューマン歌曲の夕べ～……………1～2
ちょっとお昼にクラシック 波多野睦美 & つのだたかし
～香り高きイギリス・リュートソングの世界～
……………3

SELF PORTRAIT

井上 修 ピアノ・リサイタル……………4
コール・ヴィステリー 第1回演奏会……………4
茨城の名手・名歌手たち 第21回……………4～5
最近の公演から……………5
インタビュー……………6



上:平松英子、野平一郎

下:波多野睦美、つのだたかし

平松英子、シューマンの歌の魅力を大いに語る

● 11/6(土) 平松英子(ソプラノ) & 野平一郎(ピアノ) シューマン歌曲の夕べ

シリーズ「ショパンとシューマン 夢と憧れの軌跡」の第3弾には、平松英子さん(ソプラノ)と野平一郎さん(ピアノ)が登場し、「シューマン歌曲の夕べ」と題したリサイタルを開催します。この秋の水戸芸術館の催しの中でも、目玉企画の一つです。

平松英子さんは、東京芸術大学、同大学院を経てミュンヘン音楽大学に留学し、主にドイツ歌曲やドイツ・オペラの研鑽を積んだソプラノ歌手。エディット・マティス、ペーター・シュライヤー、ヘルマン・プライといった世界的な名歌手たちと共演し、高い評価を得ました。ヨーロッパで十数年活躍した後、日本に帰国しましたが、「平松英子といえばドイツもの」という定評があります。その平松さんが、得意のシューマン・プログラムで今回水戸芸術館に初登場。透き通るような歌声と繊細な表現で、シューマンのロマンティックな歌の魅力を存分に堪能させてくれることでしょう。

共演を務めるのは、野平一郎さん。今年3月に幕を閉じた「モーツァルト:ピアノ・ソナタ全曲演奏会」での素晴らしい演奏が記憶に新しいところです(ライブ録音されたCDがナミレコードから順次リリース中)。シューマンの歌曲と言えば、ピアノの重要性がきわめて高いことでも知られるだけに、その美しい音色と豊かな表現力に大きな期待が寄せられています。

リサイタルを一ヶ月後にひかえた平松さんを東京に訪ね、インタビューを行いました。

——平松さんと言えば「ドイツもの」というイメージがあります。どのようなきっかけで、ドイツものに取り組まれるようになったのでしょうか。平松:本格的に声楽を始めたのは、高校の頃からなんですけれども、習っていた先生から「ドイツ歌曲をどんどんやりなさい」と言われて勉強し始めました。そして、大学時代は加藤綾子先生や原田茂生先生といったドイツ歌曲のスペシャリストについていたこともあって、ドイツ歌曲にどんどん興味を持つようになっていったんですね。

ところが、大学院に入るとき、私はソ科ではなく、オペラ科に入ったんです。舞台を作っていくということに非常に興味を持つようになってしまって。オペラ科に行けば舞台に関わることが出来るかなと期待して、それまでとはまったく違う方向に進みました。

——それは意外ですね。

平松:ところがですね、いわゆる裏方の勉強を期待して入ったのですが、実際は演技の勉強をするところだったのです。鈴木敬介先生、佐藤信先生、栗山昌良先生という3人の素晴らしい先生がいらして、私たちは演技を集中的に学ぶことができました。オペラにおいて「キャラクターを演じる」ということがどういうことなのか、とことん叩きこまれました。

歌曲でも、一つ一つの曲にはそれぞれのキャラクターがあって、歌い手はそのキャラクターに瞬時に入り込まなければなりません。しかも、セットもない、照明もない、演出もないという空間で、どれだけ自分の声だけで、言葉の扱いでその

キャラクターを演じ切れるかにかかってきます。自分にこれが身についたのは、大学院の時オペラ科に入って勉強したおかげだと思っています。今は教える立場になりましたが、学生たちには「歌曲を勉強したい人は、まずオペラの勉強をしてください」と言うんです。

——オペラ科を修了された後、ドイツに留学されたのですか。

平松:その時、私が思ったのは、それまで勉強していたシューベルトやシューマンやブラームスといった偉大な作曲家たちが生きていたヨーロッパの気候、風土、彼らが実際に生活していた街、そういうものを肌で感じてみたい、ということでした。石で造られた教会のオルガンの響き、冬の厳しさ、シュヴァルツヴァルト(黒い森)…、日本にいただけでは感じ取れない気候風土や文化であると思うんです。それで、ドイツのミュンヘンに留学しました。ミュンヘン音楽大学ではブラッシュケ先生という素晴らしい先生について、初めてマーラーの歌曲を勉強して…そこから本当にいろいろなドイツ歌曲に目が開いていったんですね。

——ドイツでの生活はいかがでしたか。あちらの冬は寒いと聞きますが。

平松:寒さの質は違いましたね。空気の質というか密度が違って、皮膚に突き刺さるような寒さがありました。不思議なんです、ドイツの人はみな、それでも散歩に出かける。ベートーヴェン、ブラームスなど、ドイツの偉大な作曲家たちもそ



野平一郎



平松英子

うでした。どんなに寒い日でも、外に出てちゃんと空気を吸う。どういう気候であっても、自分の肌で自然を感じ取らなければいけない——そんな意識を持っている人が多いみたいですね。私は一人でドイツ人の家庭に居候していたんですけども、ミュンヘンに渡って十数年、完全にそれに染まってしまいました。

ドイツ語の会話はけっこう大変でしたね。でも、ジョークを返せるくらいになって、だんだんとドイツ語が自然に入ってくるようになりました。そうすると、朝起きてから夜寝るまでのドイツ語の会話が、全部そのままドイツ歌曲の中に入っていることに気づいたんです。日常会話のドイツ語をそのまま、自然に話すように歌うことができたらし…と思うようになりました。それは、理想ですね。そこまで到達するために、一生勉強が続くと思いますけれども。

ドイツ語は、もしかしたらとても冷たい、とても力感がある、話すのに息の勢いがあるなど、ちょっとハードな言葉に聞こえがちなんですね。でも実際はそうではなくて、非常にやさしい、やわらかな響きを持っています。リサイタルではそれを表現できたら、と思っています。詩人たちは、ドイツ語の抑揚に合わせて、ある規則をもって詩を書いているのですが、その詩を声に出して読むと、そこに自然とメロディーが生まれ、やがては音楽になっていくような、そんな感じがありますね。

——今回のリサイタルでは、すべてシューマンの歌曲による大変魅力的なプログラムが組まれました。

平松：シューマンも、詩とドイツ語の持っている温かい響きから、言葉を話すような自然さでメロディーをつむぎ出しました。それ自体、大変魅力的なものなんですけれども、シューマンは自身がピアニストでもあったことから、非常に美しいピアノ伴奏を付けているのが独特ですね。私はこの伴奏がとても好きでなりません。そして実は、この伴奏の中に、言葉には書かれていない、もうひとつの言葉が入っているんですよ。それは、右手であったり、内声であったり、左手のベースの音であったり、いろいろなところに見え隠れするんですけども、とてもたくさんのメロディーが含まれているんですね。そうすると、私は、実際は一人で歌っているんですけども、いつもデュエットだったり、三重唱だったり、どこかに必ず相手がいるという風に感じます。見えはしませんが、

ピアノの中に必ずそのキャラクターの相手がいるという感じですね。問いかけに対して答えてくれる人がいる、不安に対しては何かアドバイスをしてくれるというような…シューマンの歌曲にはそういう面が多いと思います。ああここにもう一人登場人物がいるなあと、この疑問に対してここが答えかなあと、そんなことを考えながらいつも歌っています。

今回は本当にいろいろな曲を歌わせていただきますが、〈ミルテの花〉は各曲がバラバラで、全部違う状況の曲のように見えますけど、何か大きなつながりのようなものがあって、ここにもデュエットみたいに感じられる曲が入っています。それから、〈ゲートの『ヴィルヘルム・マイスター』にもとづくリートと歌〉。これは大変つらい状況に追い込まれた一人の女性、ミニョンの歌ですけども、いろいろな心の動きを表わしています。〈リーダークライス〉はとても静かな曲が多いですが、印象派の絵のような、見え隠れするような感じで、線がくっきりとは書かれていない、そのやわらかな響きでもって、お客様のところの中にひとつの絵が描かれるような感じを目指しています。〈女の愛と生涯〉は、一人の女性の生きざまですけども、その気持ちはページをめくるとに、少女になり、娘になり、妻になり、母になりというふうに変化していきます。それを声でどう表現できるのか、私にとっても大きなチャレンジで、こんな機会を与えていただいて嬉しく思っています。

——平松さんの歌を聴いていると、本当にニュアンスが繊細で、すぐそばで歌ってくださっているような親密な感じがあります。

平松：この前、武生の音楽祭で、オーケストラ伴奏でマーラーの歌曲をいくつか歌う機会がありました。それはそれで、とても素晴らしい音楽になっているのですが、ピアノ伴奏版にはやっぱりオリジナルの、削ぎ落した魅力みたいなものが備わっています。それに、オーケストラ相手だと、ある程度声を張り上げないとはいけません、ピアノだとその必要がなく、pやppをきちんと表現できるので、逆にダイナミックレンジは広がるんですね。

あと、ドイツ歌曲で大切なのは子音の扱いです。"sch-"とか"-cht"とか、子音が多く、しかも子音が重なることも多いですね。それを発音するときに、ものすごくいろいろな表現が出来るのがド

イツ語なんです。イタリア語のように母音が明確に出る言葉とは大きく違うところですね。ドイツ歌曲を歌う者にとって、声帯が震えて出る音ではない、息の流れと摩擦だけで出す子音で、さまざまなニュアンスを伝えることができるというのは大きな魅力です。

——ピアノの野平一郎さんとは、ピアノ伴奏版のマーラー〈大地の歌〉で共演なさっていますね。今度のリサイタルでは、お二人で、どのような世界を表現したいと思っていらっしゃいますか。

平松：今、芸大でご一緒なので、学校でよくお目にかかっています。野平さんは、作曲家、演奏家、伴奏者として本当に素晴らしい方です。マーラーやシューベルトを以前一緒にやった時も、抜群に耳の良い方で、私がやるたびに違うことをしても、いつも歌をよく聴いてくださって、何も言わずに、すうっと寄り添ってきてくださるんです。それから、ピアノから弦の音や管の音など、いろいろな音色を導き出してくださいませぬ。

〈大地の歌〉は、オーケストラ版が良く知られていますが、ピアノ版もあって、マーラーがオーケストラ版と並行して取り組んでいたものです。ピアノ版は、海老澤敏先生が楽譜に起こして、1989年に東京で初演されました（リポフシエク、ウィンベルイの独唱、サヴァリッシュのピアノ伴奏）。私は、それをピアノで弾きながら、なんていい曲だろうと感激して、野平さんをお願いして、CDにもなっていますが、本当に素晴らしいピアノを弾いてくださいました。

今回のリサイタルのチャームポイントは何かと聞かれたら、私はまずピアノの美しい響きを挙げたいと思います。先ほども申しましたシューマンならではの美しいピアノの響きに、そのハーモニーの中に、私が伴唱のように入っていく。楽譜では、歌とピアノのパートが別々に書かれていますが、そうではなくて、野平さんのピアノの中に私の歌が入り込んでいるという、極端な言い方もかもしれませんが、そういうピアノと歌が完全に一体となったような表現ができたら嬉しいですね。

2010年9月25日、東京にて
《きき手：関根》



つのだたかし



波多野睦美

こころを静かに満たす、歌とリュートの妙なる調べ

● 11/16(火) ちょっとお昼にクラシック 波多野睦美 & つのだたかし ~ 香り高さイギリス・リュートソングの世界 ~

週末や夜のコンサートにはなかなか足を運べない方にも、気軽にクラシック音楽を聴いていただき、ぜひたくて優雅な午後のひとときをお過ごしいただく「ちょっとお昼にクラシック」。毎回、一流の演奏家たちによる親しみやすいプログラムを、リーズナブルな料金(¥1,200/1ドリンクつき)でお届けしています。

今回は「香り高さイギリス・リュートソングの世界」と題し、リュートソング・デュオとして世界的に活躍している波多野睦美さんとつのだたかしさんをお迎えします。メゾ・ソプラノの波多野さんは、ルネサンス・バロック時代の歌曲をはじめ、日本、イギリス、フランスの近・現代歌曲など、幅広いレパートリーをもち、国内外で多くの演奏会や音楽祭に出演されています。そして、リュートのつのだたかしさんは、リュートやバロックギターなどのソロや、歌曲の伴奏者として、ヨーロッパや日本で多くの公演を行っています。

今回演奏していただくのは、16~17世紀にかけて作曲家・リュート奏者として活躍したジョン・ダウランドのリュート伴奏歌曲や、イギリス音楽史上もっとも卓越した作曲家のひとり、ヘンリー・パーセルの歌曲、そしてイギリスで遙か昔から歌い継がれているフォークソングの数々です。美しく詩情豊かなイギリス・リュートソングの魅力を発見していただける最高の機会となることでしょう。波多野さんの透明で潤いに満ちた歌声と、つのださんが奏でる優しいリュートの響きで、暮れゆく秋に心あたまるひとときをお贈りします。

以下、お二人にEメールインタビューをお願いしました。それぞれのお人柄が伝わってくるお話をいただいています。どうぞお読みください! 《高巢》

——まずはデュオとしての活動に限らず、今お二人それぞれがなさっている活動についてお教え下さい。

つ:自分のソロではリュートのソロ、南米の歌とギター。それから、さまざまな歌手とのリュートソング、イタリアバロックの歌。ときどき古楽器バンド「タブラトゥーラ」、宗教的な音楽を演奏する「アンサンブル・エクレジア」など。

来年1月にはシアターコクーンでの串田和美さん演出のシェイクスピア「十二夜」の音楽を担当

します。

は:今年日本語を歌う機会が多いです。

来年からは「朝のコンサート(仮題)」というシリーズをスタートします。30代後半から友人たちの体の不調をきくことが多くなり、彼女たちの話を聞くうちに考えついた企画です。夜の時間帯にコンサートに出かける余裕のない方々を対象に、朝11時から開演する1時間弱のコンサート。

——波多野さんとつのださんがデュオを結成されたのが、1990年です。20年にわたるデュオとしてのキャリアを振り返り、いかがお感じでしょうか?

つ:よくまあこんなにたくさんの企画・CDなどを重ねて来たものだと、

は:改めて振り返ると、すごいなど。次々と新しいプログラムを提示し続けてくれたのはつのださんです。イギリスのリュート歌曲をはじめ、イタリアやスペインのバロック歌曲、19世紀ギターとのドイツリート、新しいところではピアソラのタンゴまで、様々な種類の撥弦楽器と歌う機会をいただきました。それぞれの楽器と音楽にどっぷりと浸れた貴重な20年でした。

——お二人が特に大きな情熱を注いで取り組んでいらっしゃるの、今回演奏していただくイギリスのリュートソングです。イギリスのリュートソングの魅力や特質は、どんなところにあるとお考えですか?

つ:イギリスのリュートソングのもつメランコリーですね。

は:イギリスはお芝居の国です。詩がメロディを呼んで歌になる。英語の言葉のリズムの心地よさと、風土からくるウェットな旋律の美しさ、この二つがからみあったところでしょうか。

——11月16日に開催する「ちょっとお昼にクラシック」では、16世紀後半から17世紀にかけて活躍したリュート奏者・作曲家の、ジョン・ダウランドのリュート伴奏歌曲や、イギリスのフォークソング、そして17世紀のイギリスの大作作曲家、ヘンリー・パーセルの歌曲を取り上げるプログラムです。お二人にとって、それぞれどのような作曲家や作品ですか?

つ:ダウランドは私と私の楽器リュートにとって

最高の作曲家です。

は:「詩のリズムと旋律が一致している」という点では同じですが、歌うのに必要なテクニックについてはダウランドとパーセルは違います。激動のエリザベス朝に生きてヨーロッパを遍歴したダウランドと、王政復古後の開放感あふれる時代の寵児だったパーセル、それぞれの人生の違いが音楽にあらわれていると思います。両方とも私にとって大切な音楽家ですが、その違いを味わうのがひとつの楽しみでもあります。

——お二人はデュオとして、長い間共に活躍されていますが、お互いのことをどのような音楽家だとお考えでしょうか?

つ:実はとても努力家。

は:決してとどまらない音楽家。「歌」「歌手」に対してジャンルにとらわれることのない、感受性と耳を持つ人。

——音楽家として、最も大切にされていることは何ですか?

つ:健康!

は:まったく同感!

——日々の中で、一番嬉しい時はどんな時ですか?

つ:親しい友と盃を重ねる時。洗濯日和。台所に立っている時。

は:美味しいものを楽しくいただく時。スパークリングワインを飲む時。

——今後の活動予定や挑戦したいことなどについて、お聞かせください。

つ:自分の身の丈、リュートやギターの身の丈の活動をしていきたいと思っています。

は:「歌と体について」のエッセイを仕上げる。来年たちあげる「朝のコンサート」はライフワークになると思います。挑戦したいのは「ヒューマン・ビートボックス」。

——最後に、水戸のお客様に向けてメッセージをお願いします!

つ:毎朝納豆を食べています! 私が生まれたのは水郡線の塙町です。

は:納豆は苦手ですが、「黄門」ファンです!



井上 修



コール・ヴィステリー

SELF

PORTRAIT

深まりゆく秋にお届けする
ショパンの名曲とポーランド音楽の情趣。

■ 11/21(日) 井上 修 ピアノ・リサイタル

フレデリク・ショパン、彼は音楽史上に「ピアノの詩人」と異名を残した、19世紀ロマン派において最も著名な作曲家の一人である。ピアノという楽器の持つ特性を十分に生かし、繊細かつ鋭い感性で独自の世界を造り上げていった彼の作品は、メロディーや和声の美しさのためか、甘美さ、センチメンタルな面が強調され、本来彼の音楽が持つ力強さを忘れられがちである。彼の音楽の根底に流れるもの、それは何より彼の中を生きる誇り高さポーランド人としての血であり、民族的精神である。20歳までポーランドで過ごした彼に育まれた精神は、

その後二度と戻る事のなかった祖国への愛によって、いっそう徹底していった。そのような意識や祖国への愁思の念は、彼の音楽に力強い流動を与え続けている。3回目となる今回のリサイタルでは、このようなショパンの音楽を同じポーランド人作曲家の音楽の中で、より民族色の匂いを感じる事が出来ればと、プログラムを組んでみた次第である。

など書いてみると、非常に堅苦しい事この上ない演奏会に聞こえますが、奇しくも生誕200年という節目に、様々なホールで演奏されているショパンの作品を、違った角度から感じてみるのもそれもまた一興かと思ひ、企画してみました。いえ、前回のロシア音楽からちょっと西へ移動して、ポーランド音楽などと思ってみたら、偶々そうってしまっただけかもしれません。要は前回同様、僕の趣味に走ってしまったプログラムだと言う事です!!

最後に演奏予定の〈アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ〉は弾きたいという願望すら

なかった曲ですが、「戦場のピアニスト」という映画を見て以来、いつか演奏してみたい曲になっていました。破壊、喪失、絶望、しかし希望を棄てずに生きる強さ、本来そういう曲かどうかは知りませんが、今の自分なりに表現する事が出来ればと、練習に明け暮れ始めた今日この頃です…。

色々書いてみましたが、いつもながらのマニアックな選曲に、ショパンというメジャーな作品を入れてみただけかもしれません。しかし、当時アイドル並みの人気を得ていたパデレフスキというピアニストは、戦後ポーランド首相を務めた才人であり、シマノフスキはショパン以降、ポーランド音楽を世界レベルまで持ち上げた作曲家です。秋も暮れていくこの季節、そんな彼らの作品と共にポーランドの風を感じてみませんか？（そんな演奏が出来ればの話ですけど…。）皆様のご来場心よりお待ちしております！

井上 修

青春の煌めき！
水戸二高コーラス部OGが当時の顧問・齋藤由美子先生のもとに再集結。

■ 11/22(月) コール・ヴィステリー 第1回演奏会

私たちコール・ヴィステリーは、県立水戸第二高等学校コーラス部のOGで構成されている合唱団です。当時顧問だった齋藤由美子先生の指揮・指導の下、日々活動しています。

高校卒業後も合唱を楽しみたいという想いから、2005年に結成し、翌年には、齋藤先生の“藤(wisteria)”の文字から団名を“コール・ヴィステリー”として本格的に活動をスタートさせました。その後、茨城県合唱祭やアンサンブルフェスタな

どに出演し、アンサンブルフェスタでは3年連続で「げんでんハーモニー賞」を受賞しました。また2008年からは、全日本合唱コンクール茨城県大会で金賞を受賞し、県代表として関東大会に出場しています。今後も多くの演奏の場を持ち、様々な経験を積み重ね、人々の心に深く残る演奏をしていきたいと思っています。

今回は、コール・ヴィステリー単独としては初めての演奏会です。プログラムは、これまで私たちが得意としてきた宗教曲をメインに取り上げました。会場となる芸術館エントランスホールは、ヨーロッパの教会建築の様式を取り入れ設計されていますので、浅井美紀さんの美しいパイプオルガンの音色と共に、エントランスホールの、まるで教会にいるような響きをお届けできればと思います。

まず第1ステージでは、ドイツの作曲家でありオルガニストでもあるJ.G.ラインベルガー(1839-1901)の〈6つのマリア聖歌〉を、第2

ステージではエストニアの作曲家、V.トルミス(1930-)の〈秋の風景〉を演奏します。第3ステージは、水戸芸術館の「幼児のためのオルガン見学会」の講師を務め、プロムナード・コンサートにも多く出演されている浅井美紀さんによるパイプオルガンの独奏をお届けします。そして、最後を締めくくる第4ステージでは、リトアニアの作曲家でミシュキニス(1954-)の〈ミサ・プレヴィス〉を演奏します。

この度、念願だった演奏会を水戸芸術館で開催することとなり、団員一同、新たな気持ちで練習を重ねて参りました。演奏会は11月22日、季節が秋から冬に移る頃です。演奏会が終わった後には、晴れていれば綺麗な星空が見られることでしょう。それでは、たくさんの方のご来場を心よりお待ちしております。

コール・ヴィステリー 深作陽子

未来へ、世界へ羽ばたけ！フレッシュな「茨城の名手」たち

● 11/27(土) 茨城の名手・名歌手たち 第21回 司会:小林 仁

茨城にゆかりのある優れた演奏家を紹介する『茨城の名手・名歌手たち』。今年6月に行われたオーディションに見事合格し、11月27日の「茨城の名手・名歌手たち 第21回」に出演するのは、鍵盤楽器7名と弦楽器2名の精鋭たち。演奏会は、東京芸術大

学名誉教授で、今回オーディションの審査委員を務めたピアニスト・小林 仁 氏の司会とともに、個性豊かな「名手」たちによるガラ・コンサート形式でお楽しみいただきます！

まず演奏会の幕開けを飾るのは、現在桐朋学園大学1年生のピアノ・小澤叶恵さん。ラフマニノフの〈絵画的練習曲集〉から2曲と、オーディションでも高く評価されたスクリャーピンの〈幻想曲〉を披露します。



小澤叶惠



須田茉莉



藤原百子



澤田尚美



石原麻衣



石坂淑恵



茂木立真紀



掛札佳奈



忠 紗友里

2番目は、ピアノの須田茉莉さんが、スクリャーピンの《ピアノ・ソナタ 第2番》を演奏します。「幻想ソナタ」と呼ばれるこの曲の神秘的な世界を須田さんがいかに聴かせてくれるか、期待いたしましょう。

3番目は、現在パリ・エコール・ノルマルに留学しているピアノの藤原百子さん。ラヴェルの《水の戯れ》、ラフマニノフの《楽興の時》から第1、4曲を演奏します。作風が異なる二人の作品を通して、20世紀のピアノ音楽の多彩な魅力を楽しませてくれそうです。

4番目は、ピアノの澤田尚美さん。オーディションで演奏したシューマンのピアノ・ソナタ第1番に続き、演奏会では第3番を演奏します。シューマンならではのドラマチックな内面世界を存分に表現してくれることでしょう。

前半の最後は、パイプオルガンの石原麻衣さん。リストの《バッハの名による前奏曲とフーガ》を演奏します。現在、長崎の高校でオルガンを専攻している石原さん。日頃の研鑽の成果を思いきりエンターテインメントに響かせてくれるはずですよ。

後半は弦楽器の演奏から。まずはヴァイオリンの石坂淑恵さん。水戸室内管弦楽団のヴァイオリン奏者・久保田巧さんに師事した彼女が選んだのは、プロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第1番から第1楽章。若々しい感性で難曲を弾いてくれます。

7番目、ヴァイオリンの茂木立真紀さんは、既に欧州でもキャリアを積んでいる実力派。曲目はJ.S.バッハの《無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番》より「シャコンヌ」。数々のヴァイオリニストによって演奏されてきたこの曲をどのように弾く

か、楽しみです。

8番目は、ピアノの掛札佳奈さん。シューマンのピアノ曲の中でも特に親しまれている《謝肉祭》を演奏します。どの曲を演奏するかは当日のお楽しみ。この作品が持つ詩情や幻想性豊かな世界を存分に楽しませてくれそうです。

演奏会のトリを務めるのは、ピアノの忠 紗友里さん。曲目は、現代フランスの作曲家、デュティユーの《ピアノ・ソナタ》より第3楽章。オーディションでも、スケールの大きい華麗な演奏で、鮮やかな印象を残しました。本番も聴き逃しません！

以上、個性豊かなソリストたちが揃うこの演奏会。若手アーティストたちのさらなる飛躍の瞬間を、どうぞお聴き逃しなく！
《高集》

最近の公演から

SEPTEMBER



1



2



3



4

小菅優 ピアノ・リサイタル (9月11日)

シリーズ「ショパンとシューマン 夢と憧れの軌跡」の第2回として、小菅優さんが登場し、リサイタルを行った。ショパン《バラード》全4曲、シューマン《アレグロ ロ短調》、《ダヴィッド同盟舞曲集》というプログラムは、ロマン派の偉大な2人の作曲家の名作を生誕200年という記念の年にあらためて味わうに、最高のプログラムだった。小菅さんは9月7日から水戸入りし、4日間ホールに缶詰めになって練習。滞在中、「演奏家は本番が命。本番でどれだけ自由になり、作曲家やお客様とコミュニケーションできるか」と小菅さんは熱く語っていたが、そのためにはこんなにも長く厳しい準備が必要なのかと思知らされた。果たせるかな、小菅さんは本番で思う存分想像力の翼を飛ばたことができたようだ。お客様からも下記アンケートをはじめ、たくさんの賛辞の声が寄せられた。小菅さんはまた12月に「新ダヴィッド同盟」の一員として水戸に帰ってくる。リサイタルの最後に置かれたシューマンは、この新しい専属楽団発足の輝かしい序章でもあったのだ。アンコール曲は、(1)ショパン《ノクターン第20番嬰ハ短調》、(2)メンデルスゾーン《ロンド・カプリチオーソ》の2曲。《関根》アンケートから●一音一音を大切にささっていて、作曲者と対話をなさっているような演奏でした。心からの音で弾いているので、とても感銘を受けました。同世代として、これだけの演奏をされる小菅さんをこれからも応援したいと思います。(東茨城郡：S.C.さん) ●とてもすてきな演奏でした。演奏する姿が、踊ったり、飛んだり、歌ったりしているように見えて楽しかったです。小菅さんのピアノを聴いていると、本当に幸せな気持ちになれます。(笠間市：M.K.さん) ●たいへん情熱的なショパンを聴かせていただきました。小菅さんの燃

える魂を強烈に感じました。シューマンは情感に溢れた演奏でした。少し感傷的に感じました。すばらしい演奏でした。(水戸市：F.U.さん)

第49回 あひる会合唱団定期演奏会 (9月26日)

水戸の名門合唱団あひる会の創立60周年、そして、常任指揮者・鈴木良朝さんの指揮活動55年を記念する演奏会として開催された。鈴木良朝さんは、この節目の演奏会をご自身のあひる会での最後の指揮の場として選ばれた。このことを知ったあひる会のメンバーの方々の、この演奏会に懸ける想いは、並々ならぬものであった。演奏会では、その熱い思いが、まさに鈴木さんの指揮の下、ひとつとなり、聴く者にとっても大きな感動をもたらした。ステージは次の3部構成。(1)あひる会得意の中世・ルネサンスのレパートリーからヴィクトリア作品。(2)茨城ゆかりの野口雨情の詩による歌曲を池辺晋一郎が混声合唱のために編曲した作品。(このステージのみ打越孝裕さんが指揮を務めた。)

(3)19世紀のフランスの作曲家グノーの《聖チェチリアのための荘厳ミサ》。アンコールは「フォーレ：ラシーヌ雅歌 作品11」。なお、鈴木良朝さんは、本年も当館で12月12日に開催する「水戸の街に響け! 300人の《第九》」の指揮は、続けてくださることになっている。氏の音楽への情熱は、これからは変わることなく燃え続けるのだ。《中村》アンケートから●モテットの始まり(第1ステージ)、感動的に美しかった。(柏市の方) ●60周年の重みに敬意を表します。(水戸市：H.M.さん) ●第1ステージ：ハーモニーの素晴らしさと格調高さ。第2ステージ：ピアノ伴奏との絶妙のコラボ。第3ステージ：エレクトーンの伴奏とコーラスとソロ。三者の調和がとれていて、聴いていてさわやかな気持ちになりました。(無記名の方)

1~2.小菅優 ピアノ・リサイタル (9月11日)

3~4.あひる会合唱団 (9月26日)

information

- チケットに関するお問い合わせ
…水戸芸術館チケット予約センター/029-231-8000
営業時間/9:30～18:00(月曜休館)
- 公演内容や企画に関するお問い合わせ
…水戸芸術館音楽部門/029-227-8118
- 【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

●ツイッター開設のお知らせ●

水戸芸術館音楽部門のスタッフによるツイッターを開設しています。
皆様のフォローをお待ちしております。
http://twitter.com/ConcertHall_ATM

チケット・インフォメーション (10月30日(土)発売分)

- ◎ニュー・イヤーズ・コンサート 2011 ～ウィーン、わが夢の街～
2011/1/5(水)18:00開演
料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000

これからの演奏会・残席情報

○…残席あり(20席以上) △…残席わずか(20席未満) ×…残席なし
中央…中央ブロック 左右・裏…左右ブロックおよびステージ裏
補助…補助席

- ◎平松英子(ソプラノ) & 野平一郎(ピアノ)
シューマン歌曲のタベ……………11/6(土)中央○、左右○
- ◎ちょっとお昼にクラシック
波多野睦美(メゾソプラノ) & つのだたかし(リュート)
香り高さイギリス・リュートソングの世界…11/16(火)中央△、左右○
- ◎井上 修 ピアノ・リサイタル……………11/21(日)自由席○
- ◎コール・ヴィステリー……………11/22(月)自由席○
- ◎茨城の名手・名歌手たち 第21回……………11/27(土)自由席○
- ◎中村真由美 ピアノ・リサイタル……………12/5(日)自由席○
- ◎新ダヴィッド同盟
第1回定期演奏会……………12/22(水)中央×、左右・裏×、補助○
- ◎にほんのうたでむかえる
水戸のクリスマス・プレゼント・コンサート2010
……………12/23(木・祝)中央×、左右・裏○

- ※10/6(水)現在の状況です。
- ※公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。
- ※固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な11月のスケジュール

コンサートホールATM

- 平松英子(ソプラノ) & 野平一郎(ピアノ)～シューマン歌曲のタベ～
11/6(土)18:30開演、料金(全席指定):¥3,500
- ちょっとお昼にクラシック
波多野睦美(メゾソプラノ) & つのだたかし(リュート)
～香り高さイギリス・リュートソングの世界～
11/16(火)13:30開演 料金(全席指定):¥1,200(1ドリンク付き)
- 井上 修 ピアノ・リサイタル
11/21(日)15:00開演
料金(全席自由):一般前売¥3,000 学生(大学生以下)¥1,500

- コール・ヴィステリー 第1回演奏会
11/22(月)19:00開演 料金(全席自由):¥1,000
※当日は休館日ですが17:30に開演します。
- 茨城の名手・名歌手たち 第21回
11/27(土)18:00開演 料金(全席自由):¥1,500

エントランスホール

- パイプオルガン プロムナード・コンサート
11月20日(土) 開演時間:12:00/13:30(2回公演) 入場無料
※演奏は20分程度です。

ACM劇場

- リーディング・ドラマ『十二人の怒れる男』
11/12(金)18:30開演、11/13(土)14:00開演、11/14(日)14:00開演
料金(全席指定):一般¥2,000(当日¥2,300) 学生(大学生以下)¥1,500(当日¥1,800)

現代美術センター

- 石元泰博写真展
10/9(土)～11/7(日)9:30～18:00 ※入場は17:30まで
休館日:月曜日 ※10/11(月・祝)は開館、翌10/12(火)休館
入場料:一般800円、団体(20名以上)600円
※中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料
- 大友良英「アンサンブルズ2010-共振」
11/30(火)～2011年1/16(日)9:30～18:00 ※入場は17:30まで
休館日:月曜日 ※2011年1/10(月・祝)は開館、翌1/11(火)休館
入場料:一般800円、団体(20名以上)600円
※中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料

茨城の主な11月の演奏会 ※有料公演のみ

- ◆佐川文庫 TEL/029(309)5020
■アヴォ・クムジャン ピアノ・リサイタル 11/3(水・祝)18:00開演
- ◆常陽藝文ホール TEL/029(231)6611
■市毛恵子 ピアノチャリティコンサート 11/7(日)14:30開演
■藝文友の会会員優待催事 村治佳織ギターリサイタル
11/13(土)15:00開演
- ◆茨城県民文化センター 029(241)1166
■ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場オペラ 『フィガロの結婚』
11/5(金)18:30開演
- ◆日立シビックセンター TEL/0294(24)7720
■日立シビックセンター音楽シリーズ2010
『アンサンブルの祭典2010コンサート』 11/7(日)13:00開演
- ◆常陸大宮市文化センター ロゼホール TEL/0295(53)7200
■森 麻季 & 仲道郁代 デュオコンサート 11/13(土)16:00開演
- ◆ギター文化館 TEL/0299(46)2457
■福田進一 ギター・リサイタル 11/21(日)15:00開演
- ◆ノバホール TEL/029(852)5881
■ウィーン弦楽四重奏団 11/18(木)19:00開演
■中野翔太 ピアノ・リサイタル 11/20(土)14:00開演
■井上道義 & 東京音楽大学シンフォニーオーケストラ演奏会
11/21(日)15:00開演
■ウェルナー・ヒンク(Vn) & 遠山慶子(Pf)
モーツァルト:ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会 Vol.4
11/30(火)19:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2010年10月発行 第152号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130
e-mail[ankmr@arttowermito.or.jp] URL[http://www.arttowermito.or.jp/]
編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):伊東慶子 大金絢子 関根哲也 高巢真樹 中村晃
DTP/村田征司[株式会社イセブ] 次号は…
印刷所/株式会社あけぼの印刷社 今年の暮れも、水戸芸術館は歌声に包まれます。